

公益財団法人 粟井英朗環境財団

2018・2019年度 顕彰事業

地域創生 エッセイ大賞

入選作品集

◆募集目的

「持続可能な社会の実現のために、環境保全活動と地域振興活動の実践をもって社会貢献を行う」ことを目的として、2012年4月、山梨県富士吉田市に、粟井英朗環境財団が設立されました。当財団の設立趣旨に則り、山梨県の将来を担う人材の確保と育成、また各世代が希望を持ち地域づくりへ参画する契機となることを目的として、エッセイを募集し、その顕彰をいたします。

◆応募テーマ

- ①学生の部 「私の夢 ～より良い地域を目指して～」 ※高校生までのエントリーとします
②一般の部 「政策提言 ～地域創生への道～」 ※大学生以上はこちらのエントリーとなります
地域がより豊かに、喜びに満ちた社会になるために、どのような街を目指したらよいか等、自由に作文してください。

◆募集対象者

山梨県内の地域創生に対して関心のある方はどなたでも可。

ご感想をお寄せください!

お手紙、FAXまたはE-mailにて皆様のご感想をお待ちしております!

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田5587-1

FAX: 0555-23-3271 E-mail: info@awai.or.jp

公益財団法人 粟井英朗環境財団 事務局 宛

自然との共生をめざして

粟井英朗環境財団

学生の部

優秀賞

私の夢 ～よりよい地域を目指して～

堀内 はな



私は2年前の3月、小学校卒業と同時にこの富士吉田に引っ越してきた。中学校は山梨英和中学校に入学し甲府市まで毎日通学している。

周りから
「遠くて大変だね」

とよく言われるが、そうでもない。もちろん、入学当初は朝起きるのが辛く、スクールバスの往復3時間の道のりは長かった。しかし、毎日表情を変える早朝の美しい富士山を眺めながら少し得をしたように感じるようになった。

小学生の弟と妹は市内の小学校に転入したがありがたいことに直ぐに馴染み、今では「吉田の子」になった。

「ねえ、はなちゃん。本町通りにマンホールみたいな丸い形をしたものが道路にあるんだけど、それ何なのか知っている？」

と自慢げに聞かれたことがある。

どうやら小学校では「富士山学習」の授業があり質問をしたようだった。私は不安な気持ちになった。このまま、この町のことを何も知らずに、この町を出るのではないかと。

その頃がちょうど、夏休みの課題である自由研究のテーマを決めるタイミングだったので、富士吉田の歴史にまつわることにしようと考えた。

まず母の知り合いが「御師の家、外川家住宅」の館内の説明ボランティアをされているのでその方に案内をしてもらい自由研究がスタートした。キリスト教の教を説いている学校の一生徒として他の信仰をテーマにするにはどうしたものかと一瞬、頭をよぎったがやはりこの町のことを知りたい気持ちが大きかったので迷わなかった。外川家住宅には数回うかがい、その中である女性の話聞かせてもらう機会があった。その女性は富士山の近くにすみたいと東京から数年前に移住してきた方だった。とても生き生きとし、きらきらしている印象だった。そしてこの案内もボランティアでされているとのことだった。

地域創生の担い手は誰でもなく私たち住民である。住民でなくても、この地域に関心や愛着をもち、活気と豊かな暮らしを目指そうとしている仲間が必要なのだと思う。さらに企業を巻き込み、大きな力でパワーアップできるのではないだろうか。それに富士吉田市政が加われば怖いものなしだ。一部の人が内輪で盛り上がるのではなく、市民、企業、市政が同じ方向をみて高め合うことはできないのだろうか。観光客向きの企画も大切だが、ここに暮らす私たちが楽しい気持ちになるようなことができないだろうか。

「温故知新」という言葉がある。古くからの教を学ぶことで新しい知見を得られるという意味だが、この「温」というのは「復習する」「温めなおして味わう」という意味もあるらしい。守るべき歴史の部分と新しい風をうまく取り入れたらきっと富士吉田はもっともっと魅力的な町

になるだろう。

私の家ではお米と野菜を作っている。父が中心となり母や祖母も手伝っている。特にお米は種まきから稲刈りまで天気に悩まされるためか、ありがたい気持ちで新米をいただいている。年末にはその藁を使って、注連縄飾りを作るのが母の恒例行事になっている。藁の「袴」という部分を取り除き、一本一本きれいにするのは子供の仕事だ。一年を無事に過ごし、新しい年を落ち着い



畑で収穫したサツマイモ



家のお米の藁で作った注連縄飾りと手伝う弟

た気持ちで迎えることも、この注連縄づくりのおかげかもしれない。年末についたお餅の切れ端を寒い間ザルに入れて干し、3月3日のひな祭りのアラレをこしらえたり、季節を楽しみながら暮らしている。それは祖母が教え伝えてくれるから出来ることなのだ。こういった「日本の昔からある素敵」がもっと暮らしに定着出来たらいいと思う。

気軽に参加できる市民向けのツアー、神社で作るハタオリまちの生地を使った御朱印帳やお守りのワークショップ、吉田のうどんで作るグラタンなど、考えるとワクワクする。

朝焼けを浴びたピンク色の富士山と、町の灯よりきれいな星空を語ることは誰にも負けないと自負している私の将来の夢は「社会科の教師」である。歴史深く、自然に囲まれた富士吉田に住み続け、祖母や両親よりもっとこの町に愛着を持ちたいと思う。

私自身が富士吉田をもっと知り、愛するには、さまざまな関わりを持つことも必要だ。町をきれいにする清掃活動をはじめ、ボランティア活動に積極的に参加していきたい。そして、社会科教師として、富士吉田の素晴らしさを子供たちに伝えていきたい。



新屋山神社の秋の例大祭の奉納子ども相撲

●Profile

堀内 はな
2006年3月31日生まれ。
山梨英和中学校3年。部活：マンドリン部ギター担当。趣味：読書、絵を描くこと。

一般の部

優秀賞

スマートシティFUJIYOSHIDA構想

鈴木 信吾



富士吉田市の観光スポットとしては、まずは富士山で次に北口本宮浅間神社、新倉山浅間公園の五重の塔、新屋山神社、富士急ハイランドなどが有名で多くの観光客が訪れて県内一番の数を誇ります。しかし問題は多くの観光客はそれらの観光スポットを訪れた後は、日帰りか又は宿泊の場所でもほとんどが別の地域に向かいます。河口湖のホテルや旅館は人気ですが富士吉田市内に宿泊する観光客は少ない。それゆえ市内に宿泊滞在する観光客をいかにして増やすかが課題。ただし、これからは大型の宿泊施設ではなく、民泊やゲストハウスが主流となります。低料金で宿泊して節約した分を飲食や他の楽しみに使う。特に若い観光客の傾向です。それ故に間違いなく存在しているお客様をいかに楽しませるか、どのような魅力を提供出来るかです。

一案としては、パワースポット巡りが考えられます。富士吉田市内には正に多くのパワースポットが存在します。第一は、もちろん富士山ですが、北口本宮浅間神社、新屋山神社、小室浅間神社、新倉山浅間神社のほか多くの神社が存在します。これらの神社巡りを有料のパワースポット体験会として提供する。この際、インストラクターの存在は必要で靈感のある人が望まれる。NPO組織などが実施するのも面白い。不安な時代に人気期待出来ます。飲食面では、やはり『吉田



多くの参拝者が訪れる「新屋山神社」

のうどん』をもっと大々的にPRすべきで「吉田のうどん祭り」などを定期的に開催して観光客を呼び込む。現在約100店ある店に統一のステッカーやノボリの設置が必要。宿泊型観光客に向けて「プラネタリウム」が有望。近年は低価格の装置が開発されているようで既存の施設を活用できるようです。富士山のふもとから、仰ぎ見る天

空の星の存在を正確に認識してから、実際に夜空の星を観察して貰う宿泊型体験イベントを期待できそうです。シネマコンプレックスも欲しいところです。

これからの富士吉田の新しい産業として、ヨーロッパのバイオダイナミック農業方式を取り入れる。新規就農者をいかにして増やしてゆくかが全国的な課題となっています。日本の農業は、従来、兼業農家の存在で支えられて来ましたが今後は期待出来ず、実状は農業者の高齢化と後継者不在で耕作放棄地が全国的に増加しています。ヨーロッパ型バイオダイナミック農法は生産、加工、販売を一体化する方式で有機農業です。農業は多彩な要素があります。米や麦、粟、ひえなどの雑穀、豆類、芋類、各種の野菜類、果物、花、ハーブ、薬草など多岐に亘ります。これら

を小規模で多様に組み合わせて生産する付加価値の高い新しい農業が可能です。個人やNPO組織で取り組めば未来型農業として有望です。

行政の支援としては、新規就農者に対して、年間150万円の農業支援政策があります。食料自給率の低い日本の最重要な課題は食料生産です。安心、安全な食料を富士吉田で生産することは強く望まれます。これからの日本は少子高齢化でかつてのような高度成長は期待できません。社会的な問題として、ひきこもり、若年失業者、貧困家庭の増加などが切実です。それらの解決方法として最も有力なのが、農業です。生命の素である食べものを作り出すシステムこそが農業です。是非とも、富士吉田にバイオダイナミック農法を実践すべきです。農家民泊と農業体験を組み合わせる事業化する。夏場は子供達を集めて、農業体験や富士登山、バーベキュー又市内に在住する外国人を頼んで外国語学習を行なうなど多様な事業を作り出せると思います。要介護老人の方がたの健康を守る方法として土に触れる機会を用意することも有効です。

地震や台風、大雨、火山噴火などの災害に備えて避難施設と保養やリハビリ機能を備えた施設を組み合わせた公共のバリアフリー施設が必要。富士山噴火も話題にされ想定されるため地下シェルターや災害時の具体的な対応策、避難ルートの認知や具体的な情報が必要。非常時に対応出来るプロの養成と介護リハビリの技術を備えたプロの養成を組み合わせた専門学校の創設も急務と思われる。現在の看護学校をオープンにして公開講座を実施して貰う。今後、想定される

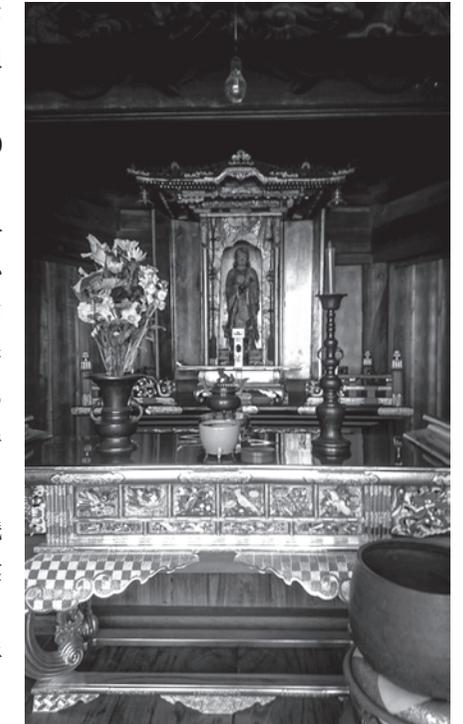


富士山ビュースポットとしても有名な「富士吉田市農村公園」

多種の災害に対して市民の意識を高め、日頃の備え、訓練などを実施して市民同士の連帯を強化する必要があります。子供たちの健全な成長を促すためには、第2次富士吉田市食育推進計画で掲げられている『朝ごはん』が肝心です。安心安全な素材を使った健康な朝ごはんのモデルを提案、試食会などの実施も期待されます。和洋中に分けてコンテストを実施して意識を高める。

●Profile

鈴木 信吾
1946年 東京生まれ。1964年 吉田高校卒業。1970年 芝浦工業大学卒業。
現在、自然食品の開発及び販売を仕事にしています。



聖徳太子立像が安置されている「福源寺」

奨励賞

ボランティア活動に生きがい

舟久保 ふみ江

会社を定年退職した人が、専業主婦を卒業した人が、子育てから解放され、子離れしてきた人が、自分の時間が出来た時、これから何をしようかとふと考えた時、自分の好きな事をしてみたい、何にか生きがいを見つけてみたいと思うかもしれない。そんな時一つの思いとして、誰かのために、社会のために、又、自分のためでもあるボランティアをしてみたいと一人一人が思えたら、いいなあと思います。私も七十代になってからあるきっかけから河口湖町にある、NPO法人「富士と湖とかかしの里」のボランティアをさせて頂くようになりました。

その中の、こども食堂が月二回、午前十一時から午後二時の間、その時、その時のメニューが色々違い誰でも来て、大人三百円こども百円でごはんを食べる事が出来ます。そして、同じ「こども食堂」の日に、午後一時から、午後三時までこども達に勉強を教える学習支援があります。健康科学大学、昭和大学、看護専門学校生徒さん達が交代で三～四人ぐらいでボランティアに来て下さり「こども食堂」に来たこども達、希望者に勉強を教えて下さいます。「こども食堂」には、親子づれ、こども達、おとしよりの人達が来て、ごはんを食べながら顔なじみの人、初めて逢う人、それぞれの中で楽しそうに、お話しをしています。それを見ていると私達ボランティアの人達も楽しく、うれしくなります。

それから着る事のない着物をほどこいて服に、リメイクする「着物リメイク教室」が、第二木曜日と第四木曜日の月二回あります。どんな服を作ろうかなと考える楽しみも喜びになります。それ以外の日には、かかしの家に集まった人達が小物作りをしたり、お茶を飲んで、おしゃべりをして、コミュニケーションの場となっています。ある日韮崎市穴山町に、かかし祭りがあると聞き、かかしの里の皆さん何人かでお邪魔し、かかしの作り方を教わり、かかし二体作って、そのかかしを、かかし祭りのイベントに出展させて頂き、それにも招待され参加させて頂き色々なかかしを見せてもらい、とても勉強になり、何にも知らない私には貴重な体験で本当にありがたかったです。

雄大にそびえ立つ日本一の富士山が、今や世界遺産になり、外国から観光客が大ぜいおとずれるようになって外国人が日本の文化、昔ながらの伝統に興味を持つようになり、それを知りたい体験したい観光ツアーがふえてきたような気がします。そこで昨年の春頃でした。山梨の特産ほうとう作りの体験ツアーがあり、「富士と湖とかかしの里」が協力して、ほうとう作りの体験を二回ばかり実施させて頂きました。昔、学校から帰ってくると、よく家庭で、ほうとう作りをさせられ、それが嫌で嫌で、なまけたい時もありました。でも、それが今、外国人の人達にほうとう作りを体験させるとは思いもよませんでした。なぜか、一つ役に立てる事ができたような気がして、うれしくなりました。

今までボランティアの言葉の意味も漠然としていた自分だけど、ボランティアをさせて頂く事によって、そこに生きがいを見つける事ができありがたいです。そして、本当に困まっている人達、貧しい人達、身障者の人達に手をさしのべて行ける事の勉強、経験を、もっともっと、する

べきだなと感じました。そして、又思う事は、おとしよりや若者達、こども達と膝をつき合わせ向かいあって色々とお話しが出来る交流の場、場所がいくつもあったらいいなあと思います。

親から子へ、子から孫へと昔から、ある文化や伝統を伝えていく事も必要ではないだろうか？そこから市や町の悩み、過疎化の問題も少しは解決していくのではないかと思います。富士吉田市の、キャチ・フリーズ、おもてな市もどこまでおもてな市になっているのか判りきれない所があります。うわべだけのおもてな市でなく、もっと判りあえる富士吉田市であってほしいと思います。みんな一人一人が寄りそい集まって一つの輪から大きな輪へと変わった時、人にやさしくできる心が生まれ、自然環境保護への心が、世界平和への、かけ橋につながるのではないのでしょうか。私達としよりが少しでも生きがいを求め、誰かのため、出来る事があればお手伝いさせて頂き協力しながら未来のこども達に託したいです。

奨励賞

表裏一体

宮 下 凌

富士吉田及びその周辺の富士北麓地域には魅力がある。例えを挙げればきりが無い。雄大な富士の絶景、豊かな自然、織物などの地場産業。この地域には唯一無二の魅力がある。しかし、だからこそこの地域の未来は危機的状況にある。

観光客などの外から訪れる人は東京オリンピック影響もあり、年々増加している。特に外国人観光客の増加が著しい。河口湖の駅前は一昔前とは比べられないほど、横文字の看板が増え、外国と錯覚してしまうほど外国の言語が聞こえてくる。要するに近年、観光業が北麓地域の主産業になっているのだ。

このような傾向には決して悪いことではない。外から人が来ることによって新たな雇用を生み街は活気づくことだろう。しかし現状はどうだろうか。街は活気づくどころか緩やかに衰退しているように見えるのは私だけだろうか。観光客の増加に伴い人口は増加すると思われたが、富士吉田市の人口は増加するどころか減少している。これは少子高齢化の波を受け、ある程度仕方ないことではあるが、そこでこの問題を消化するのはこの北麓地域の将来のためにはならない。

話を戻すが観光業は盛んになっているが、地域は活気づいていないので、観光業と地域の活気というのは恐らく、一方の影響でもう一方が盛んになるという相互に影響しあう関係でもなさそうである。

この地域には富士山があり、豊かな自然がある。それらはある日突然消えることはないだろうか。観光業は衰えることはない。だから北麓地域も活気を失うことがないだろうと大体の人は口にせずともどこかで思っているのではないだろうか。この慢心こそがこの地域の将来にとってとても危険である。観光業とは現在の状況がいつまでもつかわからないとても不安定な産業なのである。

だからと言ってこの貴重な観光資源を生かさないのももったいないことである。富士山をはじめとした周辺の自然はもはやこの地域だけのものではなく、世界の宝となりつつある。この観光資源はより多くの人にアピールすべきである。問題なのはこのままだと観光業に依存しすぎてし

まうのではないかという懸念である。

活気があふれるような地域にするにはやはり観光業とは別にこの地域ならではの地場産業に力を入れていくことが重要である。例えば富士吉田にはもっと売り出していくべき産業がある。先述した織物である。全盛期にはどの家にも織物小屋があり、あちらこちらから機織りの音が聞こえたという。その他にも知られていないだけで、どの地域にもないような産業があるはずである。

このように既存のものしくは新しい産業の発展に力を入れていくことによって、様々なメリットが生じる。

その一つが雇用の促進である。産業が発展していくと当たり前だが人手が必要になる。そうすると今まで県外に流失していた若者が地元に残って職に就く可能性が上がる。私の周りにも大学卒業後は首都圏での就職を希望している友人がたくさんいるが、そのような人の中にはどうしても県外で就職を希望しているわけではないように思われる。地元に戻ろうにも職が限られてくるので仕方なく県外に出ていくことを決める者も少なくない。しかし地元で魅力的な産業があり、そこに多くの雇用が生まれれば県外に流失する若者も減少するのではないか。

またこの地域独特の産業があればその魅力にひかれて外からも就職希望者が増えることが予想される。雇用が増加することにより、人口は増加し、地域に活気が生まれることは想像に難しくない。

幸いにも売り出すべき産業もそれを広める手段も揃っている。織物産業はすでに完成されている産業であるし、この技術をより様々な事業に拡大することもできる。このような産業はより多くの人に知ってもらう必要がある。これに一役買うのが北麓地域で盛んな観光業である。

多くの観光客が訪れるということは、その人たちに知ってもらう機会があるということなのである。観光客が多く訪れる場所で地域の産業について知ってもらえるようなことを積極的に行うことができれば多くの人に知ってもらえるだろう。

このように今ある産業を利用して、また別の産業を発展させていくことが地域創世の一つのカギとなるのではないだろうか。

奨励賞

地域活性化への提言

佐藤 秀明

私たちは自然の美しい「まち」、歴史ある「まち」に住みたいし、その中で良い環境を整えていくことを望んでいます。地方では働く場所が少なくなり、その結果人口が減り、地域の消費需要も減少し、地域経済が縮小していった。これまでの日本は福祉より経済中心の政策が行われ、地方活性化のために企業誘致は必要だと言われ、そのためには道路、河川、農業基盤、公共施設と公共事業を中心とした経済成長を行ってきました。企業を誘致する目的は雇用の増加でした。そのことによって人口が増加はしなかったし、憲法25条に掲げた国民の生活も十分に達せられなかった。解決は今までと違った点から検討しなければなりません。企業を誘致し、人口が増加し、地域が活性化し、その結果として地域住民が幸せな住みよい「まち」にするためには、過去を振り返ってこれからの「まち」をどう運営せねばならないか考える必要があります。

50年以上前から富士吉田市は目標として「織物と観光の町」を目指したが、まちを支えてきた織物は衰退し、観光は伸び悩んでおります。いくつかの企業は他地区に移り、今では人口は4万9000人を割り、周りの町村に比べ対策は立ち遅れはっきりしています。いまだに道路建設が地域活性化の目標と言われている。新しく道路が出来た時、交通が便利になり、買い物客が都会に流れてしまうのではないか。道路がよくなって観光客が訪れるその前に観光地を見学する施設がどのように整えられているか。でなければ観光地の魅力も道路の効果も発揮されません。忠霊塔の桜も周辺の整備がされなければ一過性の観光地になります。観光地が整備されることによって多くの観光客が集まり、その人たちが消費する金額は地域の飲食店や、宿泊施設、土産店を大いに潤わせます。そのための観光地周辺の整備は必要です。この地方は富士山が山岳信仰のメッカとして歴史あるまちです。江戸時代からの富士講の歴史を生かした具体的な「まちづくり」整備に力を入れるべきであります。

教育による町造りを目指すならどのような対策を立てねばならないのか。教育の質の向上は地域の活性化には欠かせない。人口減少が進む中で、地域に子供の数が少なくなっている現在、若い夫婦が子供を産み、育てやすい環境を作るために何をせねばならないか。子供の貧困率が増加している現在どのように解決するか。子供の医療の無料化、保育園の保育料の無料化が進む中で、さらなる就学前児童・小中学校生徒・高校生までの給食費の無料化をするために財政として、どのような援助ができるのか。学級の生徒数の見直しも、学校生活にかかる修学旅行、文房具にどれだけの財政援助が出来るか。放課後の学童保育の充実も、教育設備拡充も数多くの解決しなければならぬ問題が数多くあります。若い人たちの教育は地域の発展には欠かせない。

職場を離れた人が再就職するための再訓練の場を作ることも必要であります。これからの日本経済を支えていくためには新しい技術革新は必要です。時代に即したプログラマー、AIなどの最新の技術を取り入れた再教育の場を提供することは地域の活性化に役立ちます。

この地域には旧11カ村の入会権利者の代理人として恩賜林組合が存在しています。数年前に地元木材を使用したペレット燃料工場が開設された。学校などの公共施設にペレットストーブを普及させると言ったが、その成果はどのようになっているのか。自然エネルギーを活用することは地域にとってエネルギーの地域内生産として大きなプラスになると思います。このペレットストーブの普及は進めなければなりません。木材を利用した再生エネルギーの新たな企業の進出も期待されます。森林整備と自然破壊の防止にも、雇用にも役立つ。さらに恩賜林組合の東側に森林公園がある。この公園と隣にある散策公園、道の駅、鐘山の滝のある富士見公園の一角は観光地として、市民の憩いの場所として活用する必要がある。

地域の織物、木工製品、農産物を観光客に販売している販売拠点の「道の駅」がございいます。生産・加工・販売を生産者が行う6次化の流れが注目されています。各生産者の組織もあります。その組織を利用した6次化に取り組む必要もあります。生産者にどのような技術のノウハウと援助を与えることが出来るかも検討しなければなりません。その生産の技術を多くの地元生産者に薦める努力も必要です。そのために行政の力も必要です。

空き家、自然環境破壊、街並みの復興、地域のドーナツ化現象、コンパクトシティーと地域活性化のためには解決しなければならない問題が数多くあります。

一般の部

優秀賞

信頼がつくる地域創生 ～二地域居住者の取り込みに対する提言～

渡邊 えりか



「信頼してこそ、人は尽くしてくれるもの」山梨県を語る時に、なくてはならない武田信玄公の言葉である。何をもちいて信頼と定義するかは様々であるが、私はこの「信頼」こそ、地域創生にとって、重要なキーワードであると考えている。

春はピンク色に染まった大地が芽吹き、夏の山々は青々しい緑に輝く。黄金色の葉がハラリハラリと風に戯れる秋が過ぎると、真白き富士が荘厳さを増す冬となる。自然に触れ、深い呼吸をして、また高速バスに乗り込む時間を迎える。そう。私は心の安寧をもたらす郷土を想い、山梨県と東京都のいずれにおいても仕事をしながら、二地域居住生活を送っている。

度々、利用する中央道は1982年に全線が開通すると共に、山梨県の雇用環境の向上をもたらした。しかし、国立社会保障・人口問題研究所によると、2040年の総人口は減少が続き、約66万6千人となることが推計されている。全国同様、山梨県においても人口減少の問題は顕著である。人口の変化は地域の将来にどのような影響をもたらすのか？ 既に周知されているが、今一度、整理してみようと思う。1つ目に労働力不足による地域経済の衰退。2つ目に老年人口の増加に伴う医療・福祉サービスの不足。3つ目に、若手世代の減少による文化継承のつまずき。そして4つ目に、子育て家庭の減少による次世代育成の崩壊。上述した4つの問題を抱える中、地域がより豊かに、活力あふれるために、定住人口の増加だけではなく、「二地域居住生活をライフスタイルとする人々を取り込むこと」を私は提案したい。

2014年に国で制定された「まち・ひと・しごと創生法」に基づき、山梨県では「まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」として、県とつながりをもつ人口を「リングージ人口」と定義し、定住人口とリングージ人口の連携を強化することによって、持続的かつ魅力的な県づくりを目指すことを宣言している。今やネットがつながる環境があれば、仕事や生活が手軽に管理できる時代である。二地域居住生活で、より充実したライフスタイルを送る設計図を提供できれば、山梨県に信頼をよせ、山梨県に尽くしてくれる多くの人々を取り込むことができるのではないだろうか。

では、二地域居住生活には何が必要か？ まずは居住地である。毎回、宿泊先を探すのは当たり前だが居住生活とはいえない。居住とするならば、二地域居住者専用のシェアハウスや空き住宅を活用した賃貸物件の斡旋など、行政が企画し、不動産会社等で事業管理が図れば、信頼性も高くなる。次に仕事だ。社員でも第2の仕事を考えるご時世である。二地域居住先で仕事を持つことができれば、いずれは移住先に代わり、新たな定住人口の獲得につながるだろう。

長野県松本市では滞在型市民農園の導入により、首都圏のシニア層を中心に二地域居住希望率が高まっているようだ。これからの「二地域居住者の取り込み」には、シニア層だけではなく、多くの年齢層が関心をもつ二地域居住生活の仕組みを提供することが求められる。例えば、医療・

福祉サービス事業のイベントや、次世代育成のための教育・文化活動ワークショップなど、二地域居住希望者を対象とした企画を開催する。山梨県を知り、地域住民と関係を形成できるよう育むためには、イベントやワークショップから就労に向けた研修講座や試用期間につなげていくことが求められる。仕事を広げる機会を提供することができれば、人口減少によって影響があらう問題の解決策としてつながるのではないだろうか。さらに、新しいライフスタイルを求める人々によって、山梨県に新たなエンパワメントをもたらしていくであろう。

地方創生には地域社会における人と人との共生が求められる。共生が成り立たなければ「信頼」は育まれず、地域創生に結びつかないのではないだろうか。

しばらく私の二地域居住生活は続く予定だ。「信頼してこそ、人は尽くしてくれるもの」信玄公の言葉を受け止め、この先の山梨県を創っていきたいと思う。



ママと赤ちゃんのための音楽療法現場にて



講演会の様子

●Profile

渡邊 えりか
富士吉田市出身。国立音楽大学音楽教育学部ならびに早稲田大学人間科学部卒業。東邦音楽大学音楽療法学部研究コース修了。埼玉県の国際音楽療法専門学院で従事しながら、富士吉田市内外で、音楽療法を実践している。日本音楽療法学会認定音楽療法士。一般社団法人日本教育支援ネットワーク統括責任者。